

# トーマス・マンの『ブッデンブローク 家の人びと』について (1)

堀 内 泰 紀

## I. 成 立 史

トーマス・マン (Thomas Mann) の父、リュウベック市参事会員トーマス・ヨーハン・ハインリヒ・マン (Thomas Johann Heinrich Mann) が51歳の若さで敗血症で死亡したのは、マン16歳の晩秋のことであった。翌1892年に幼い妹と弟を連れミュンヘンに居を移していた母ユーリア・マン (Julia Mann) の後を追ひ、学業を終えたマンが故郷の町リュウベックを離れたのは、それから約2年後の1894年3月16日、マン19歳の春であった。

同年4月マンは、ミュンヘンの「南ドイツ火災保険銀行」(Süddeutsche Feuerversicherungsbank) に入社し、無給見習社員として仕事を始めるが、すでに同年秋には職を辞し、ジャーナリストを志し、ミュンヘン工科大学の聴講生として「幾分不安定な職業の一般的な準備をするのに適当と思われた講義」(XI, S. 102) を聴講し始めるのである。<sup>(1)</sup>

翌1895年7月から10月にかけての兄ハインリヒ (Heinrich Mann) との最初のイタリア旅行からミュンヘンに戻ったマンは、兄が編集を引き受けていた雑誌『20世紀』(*Das Zwanzigste Jahrhundert. Blätter für deutsche Art und Wohlfahrt*) に協力しながら、翌1896年夏には短篇小说『幸福への意志』(*Der Wille zum Glück*) を発表する。

すでにイタリアに戻りローマで暮っていた兄の招きに応じて、マンが再びイタリアに向けて旅立ったのは、その年の10月であった。ヴェネツィアに3週間滞在の後、アンコーナ、ローマを経由しナポリに旅装を解いたマンは、当地で11月に短篇小说『幻滅』(*Enttäuschung*) の稿を起こしたようである。所期の予定を変更し、<sup>(2)</sup>ローマに腰を落ち着けるつもりになったマンは、翌12月同地へ赴き、<sup>(3)</sup>兄と共同で、パンテオン (Pantheon) に近いトルレ・アルジェンティー

トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人びと』について(1) (堀内)

ナ通り (Via di Torre Argentina) 34番地に居を定め、主として北欧文学とロ  
シア文学の読書三昧の日々を送るのである。

そこから『新ドイツ展望』(*Die Neue deutsche Rundschau*) 誌に、すでに  
ミュンヘンで擱筆していた短篇小説『小男フリーデマン氏』(*Der kleine  
Herr Friedemann*) の原稿を送ったことが機縁となり、その編集者オスカー・  
ビー (Oskar Bie) の勧めもあって、ベルリートのザームエル・フィッシャー  
書店 (Samuel Fischer Verlag) からマン最初の短篇集が『小男フリーデマン  
氏』の標題で公刊される目処がついたのである。<sup>(5)</sup>

1897年5月29日付で、フィッシャー書店主ザームエル・フィッシャーからマ  
ンのもとに一通の手紙が届いた。

「〔……〕貴殿の手になります比較的長い散文作品、長篇小説を一篇出版する  
チャンスを私にあたえていただければ嬉しく存じます。」<sup>(6)</sup>

この事務的な依頼の手紙によって、マンが作家としての自己の資質を確認す  
ることになる処女長篇小説『ブッデンブローク家の人びと』(*Buddenbrooks*)  
執筆の契機が、当時無名に等しい青年作家にあたえられたのである。

はじめの予定では、この長篇小説は、マンがローマ滞在中に読んでいたゴン  
クール兄弟 (Edmond und Jules Hout de Goncourt) の『ルネー・モプラー  
ン』(*Renée Mauperin*) のように、兄ハインリヒとの共同執筆になるはずであ  
った。<sup>(8)</sup> 1897年夏、マンが未だタイトルの決定しない長篇小説の準備作業にとり  
かかったのは、ローマ近郊の町パレストリーナ (Palestrina) においてであ  
った。<sup>(9)</sup> その年の秋再びローマに戻ったマンは、周到な準備を終え、いよいよ処女  
長篇の執筆に着手したのである。1897年10月末日、マン22歳の秋のことである。

「身を切るような北風の日々とむし暑いシロッコの日々とが交互する」(XI,  
S. 103) イタリア二度目の冬を永遠の都ローマの寄寓で過しながら、マンが「一  
枚また一枚とゆっくり積み重ねていった」(XI, S. 380) 原稿は、翌1898年2月  
はじめには、全篇の約5分の1にあたる第3部の終わりにまで膨れあがってい  
た。当初は、250ページ、全15章程度の規模の作品になる予定であった。<sup>(10)</sup>

しかし、予定の枠がこのように崩れたことから、マンは、彼の作家生活にお  
いてこの後もしばしば現われることになる「作品そのものがもつ我意」(XI, S.

381) に、ここではじめて出会うことになるのである。<sup>(1)</sup>「すでに容易ならぬほどに嵩を増した原稿を携えてミュンヘンへの帰途についた」(XI, S. 104) のは、マンが故国を離れてからおよそ1年半ぶりの1898年4月末であった。

ミュンヘンへ戻ったマンは、月額100マルクの報酬で文芸雑誌『ジンプリチムス』(*Simplicissimus*) 編集部で、原稿鑑査および校正の仕事を請け負う。この仕事は2年たらず続くが、マンはその間ミュンヘン市内で転々と住居を変えながらも、「個人的な本業、すなわち『ブッデンブローク家の人びと』の仕事」(XI, S. 106) を倦むことなく続<sup>(2)</sup>けていた。こうしてまさに19世紀最後の年、1900年5月に、25回目の誕生日を目前に控えたマンは、処女長篇『ブッデンブローク家の人びと』を擱筆したのである。起筆後2年半あまりの歳月が流れていた。

一部しかない自筆原稿は、1000マルクの損害保険をかけてフィッシャー書店へ送付された。しかし、即座に出版の手続きがとられないばかりか、S.フィッシャーは『ブッデンブローク家の人びと』の短縮を要求してきたのである。同年10月1日付でバイエルン近衛歩兵連隊 (das Königl. bayerische Infanterie-Leibregiment) に1年志願兵として入隊していたマンは、その頃すでに足関節の腱鞘炎を患い、ミュンヘンの衛戍病院に入院中であった。そこからマンは、フィッシャーに宛てて急ぎ短縮を拒む手紙を認める。

「私は衛戍病院から鉛筆書きの手紙をフィッシャーに宛てて出した。その手紙で私は、思いきった短縮の要求をはねつけて、このヴォリュームが、この長篇自体の本質的な、手を触れられない特色であることを説明した。不安な思い一杯で走り書きしたこの手紙は感動的で、せっぱ詰っていたのでうまく書けていた。」(XI, S. 113)

その後しばらく事態が変化しないことに起因するマンの懸念は、当時彼が友人や兄ハインリヒに宛てて書いた手紙から、十分に推察することができる。

「『ブッデンブローク家の人びと』がこれからどうなることかさえわかればなあ！ 今日誰にでも書けるといふわけにはいかない章があることは確かなんです。それでもやはり、僕は『ブッデンブローク家の人びと』が、いつまでもこのまま放っておかれるのではないかと心配しないではいられないのです。<sup>(3)</sup>」

兄ハインリヒに宛てたこの私信からは、マンの胸中に交錯する不安と自負が読みとれるであろう。しかし、翌1901年2月13日付のハインリヒ宛ての私信で、漸く事態の好転が告げられることになる。

「〔……〕最近 S. フィッシャーから一通の手紙が舞いこんで来ました。それによると、まず春に僕の二番目の小さな短篇集を出し、10月には『ブッデンブローク家の人びと』を短縮せずに、たぶん三巻本の体裁で出版したいとのことだ。僕は右手を燕尾服のチョッキに入れ、左手をその三巻本の上についたポーズで写真を撮ってもらうつもりです。それでほんとうに安心して墓場へ行けるというものです。」<sup>(44)</sup>

アルトゥール・ホリツチャー (Arthur Holitscher)、オスカー・ビー、『ブッデンブローク家の人びと』の原稿鑑査役モーリッツ・ハイマン (Moritz Heimmann) の推薦、さらには先述したマン自らの短縮不可能を訴えた手紙が、この事態の好転をもたらすことに与って力があつたのである。<sup>(45)</sup> 5月には活字組みの作業が開始された。二度の校正を経た後の8月半ば、すなわちフィッシャー書店がマンの原稿を受領して1年後、『ブッデンブローク家の人びと』の原稿は、ついに製本に附されるに至つたのである。

ハンザ同盟都市リューベックを叙事的空間として細緻に語られたある一家族の没落物語は、原稿完成後紆余曲折を経て、20世紀最初の年の10月末、二巻本の体裁で漸く陽の目を見たのである。起筆後4年、トーマス・マン26歳の秋であつた。<sup>(46)</sup> (以下続稿)

(注)

本論文のテキストには Thomas Mann: *Gesammelte Werke in 13 Bänden*. Frankfurt am Main: S. Fischer 1974. を用い、トーマス・マンの作品からの引用は、巻数、頁数を文中( )内に示す。*Buddenbrooks* の成立史その他については、Thomas Mann: *Buddenbrooks. Verfall einer Familie*. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. Frankfurt am Main: S. Fischer 1981. の編集者の後書きも参照した。

なお、『ブッデンブローク家の人びと』にはさまざまな邦訳があり、参考にさせていただいた。

## I. 成立史

- (1) マンが聴講を申し込んだ講義は、  
マクス・ハウスホーファー教授、国民経済学    フェーリクス・シュティエーヴ  
エ教授、文化と世界史    ヴィルヘルム・ヘルツ教授、ドイツ神話学    フラ  
ンツ・フォン・レーバー教授、美学原論    カール・フォン・ラインハルトシ  
ュテットナー教授、シェイクスピアの悲劇 の5講義であり、彼自身の言によ  
れば、当分は規則正しく出席していたそうである。  
Vgl. Hans Bürgin und Hans-Otto Mayer: *Thomas Mann. Eine Chronik  
seines Lebens*. Frankfurt am Main: S. Fischer 1965. S. 14.
- (2) *Ebenda*, S. 16.
- (3) 予定では、前年に引き続き、2度目のイタリア旅行になるはずであった。  
Vgl. Klaus Schröter: *Thomas Mann in Selbstzeugnissen und Bilddoku-  
menten*. Hamburg: Rowohlt 1964. S. 45.
- (4) 『ブッデンブローク家の人びと』にあらわれた北欧文学の影響について論証し  
たものに、Uwe Ebel: *Rezeption und Integration skandinavischer Lite-  
ratur in Thomas Manns „Buddenbrooks“*. Neumünster: Karl Wachholtz  
1974. がある。
- (5) 出版は1898年春、マンのローマ滞在中であった。この処女短篇集には、標題の  
『小男フリーデマン氏』の他に『幸福への意志』(*Der Wille zum Glück*)、『死』  
(*Der Tod*)、『幻滅』(*Enttäuschung*)、『道化者』(*Der Bajazzo*)、『トビーア  
ス・ミンダーニッケル』(*Tobias Mindernickel*) が収録されている。
- (6) Paul Scherrer: *Aus Thomas Manns Vorarbeiten zu den „Buddenbrooks“*.  
*Zur Chronologie des Romans*. In: Paul Scherrer und Hans Wysling:  
*Quellenkritische Studien zum Werk Thomas Manns*. Bern und München:  
Francke 1967. S. 7.
- (7) Vgl. Thomas Mann: *GW. XI*, S. 379 f.
- (8) Vgl. Bürgin und Mayer: *a. a. O.* S. 17.
- (9) 晩年の長篇『ファウストゥス博士』(*Doktor Faustus*) の重要な舞台のひとつ  
となる、イタリアルネサンス音楽の巨匠パレストリーナ (G.P. da Palestrina)  
生誕の地から、マンはリュエベック在住の亡き父の従兄弟ヴィルヘルム・マル  
ティ (Wilhelm Marty) や2歳下の妹ユーリア (Julia Mann) に、リュエベッ  
クの市政関係の状況、家庭内の出来事などについて問い合わせている。  
Vgl. *Ebenda*, S. 17.

トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人びと』について(1) (堀内)

(10) Vgl. Thomas Mann: *GW. XI*, S. 380.

(11) 『魔の山』(*Der Zauberberg*)などの成立状況もこれに類したものである。

(12) ただし、短篇小説『衣装戸棚』(*Der Kleiderschrank*)、『しっぺ返し』(*Gerächt*)などの執筆、さらには1899年9月のリューベック経由のデンマークへの休暇旅行により執筆は一時中断されている。この休暇旅行の際に、マンは代表作のひとつ短篇小説『トーニオ・クレーゲル』(*Tonio Kröger*)の構想を得ている。

Vgl. Bürgin und Mayer: *a. a. O.* S. 19.

(13) Thomas Mann: *Briefe 1889-1936*. Hrsg. von Erika Mann. Frankfurt am Main: S. Fischer 1962. S. 18. 友人の小説家クルト・マルテンス(Kurt Martens)に入院中の病院から宛てた私信にも、『ブッデンブローク家の人びと』について新しいニュースのないことが書かれている。

Vgl. *Ebenda*, S. 15.

(14) *Ebenda*, S. 25 f.

なお、春に出される予定であった短篇集は出版されず、マンの第二番目の短篇集『トリスタン』(*Tristan*)が世に出たのは、1903年の春である。

(15) Vgl. Schröter: *a. a. O.* S. 62.

(16) マンは自伝『略伝』(*Lebensabriß*)において出版を1900年の末と記しているが、これはマンの思い違いであり、1901年である。

Vgl. Thomas Mann: *GW. XI*, S. 113. und Bürgin und Mayer: *a. a. O.* S. 22.